# 学力検査問題［国語］（その一）

（2023 ― 般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

**1**

次の文章を読んで、問一～問八に答えよ。

家にいる時には夜よくラジオを聞く。テレビは一ヶ月に一度くらいしか見ないが、それはテレビの映像が映画に比べて耐え難くチャチであるというだけでない。(1)話される言葉が、やたらに絨毯を持ち上げてバタバタさせているだけで、埃が舞いたち、落ち着かないわりに、少しも刺激がないという点にある。

国営放送のラジオ番組は充実している。放送劇、ドキュメンタリー、文芸時評、演劇評、絵画展の紹介、翌日のいろいろな新聞が（フランスやイタリアの新聞も）同じ事件についてどう書いているかを短く比較紹介していく番組、文学作品の朗読、現代音楽家へのインタビューと作品紹介などいろいろある。わたしの一番好きな局は《ラジオ・ドイツ》のベルリン局。昔は北ドイツ放送などもよかったが、最近予算が足りなくなってきたのか、内容が薄くなり、ＣＤばかりかけてごまかしているような傾向が強くなってきた。ドイツでは、ラジオが文学に果たす役割は大きい。

詩や小説を読む時には、言葉を聞いて映像を思い浮かべる能力が要求される。映像を生み出す言葉の力を聴覚を通して最大限に引き出してくれるのがラジオ文化ではないかと思う。だから、本を読むのが好きな人には、ラジオを聞くのが好きで、テレビが嫌いな人が多い。

わたしがハンブルクに来たのは一九八二年のことだが、当時のわたしの耳は今のわたしの耳とは違っていたと思う。ドイツ語はすでに日本で勉強していたものの、聞き取りの能力はなかった。辞書を引きながらなら、かなり難しい本でも読めたし、［A］も単語も分かっているから、こちらから言いたいことは言えるが、相手の言うことが聞きとれない。赤ん坊の逆である。赤ん坊なら本は読めないし、まだしゃべれないが、人の言うことはかなり分かる。わたしが自分から一方的に作った文章は［A］的に正しくても、理屈だけで組み立てたものであるから、音楽的流れはなかった。そのうちに、だんだん相手の言っていることが、すいすい耳に入ってくるようになってきた。それは、個々の単語や文節が聞き取れるようになってきたということの他に、全体の流れが音楽的につかめてきたということだろう。

たとえば、音が揚がったままなら、まだ文章は終わっていない、というような単純なメロディーの問題に加えて、意味の区切れ目もリズムで分かるようになる。主文には主文の、副文には副文のメロディーがある。一つの文章の中に、強くゆっくり発音する単語というのが必ずあり、それが意味の中心をなす。他の単語は、弱く早足に通り過ぎていく。つまり、文の構造は文のメロディーにある程度現れていて、それを音楽的に聞き取れれば、［B］をもらって大きな建物の中を歩くようなものだ。

母語の外に出ることは、異質の音楽に身を①マカせることかもしれない。(2)※エクソフォニーとは、新しいシンフォニーに耳を傾けることだ。

長年その土地に暮らして、会話を重ねれば、いわゆるネイティブ・スピーカーと喋り方が似てきて、「なまり」がなくなってくる。しかし、なまりをなくすことは語学の目的ではない。むしろ、なまりの大切さを視界から失わないようにすることの方が大切かもしれない。田中克彦氏の『クレオール語と日本語』を読んでいたら、「発音のみならず、思想のナマリがなければ、その人はフランスの勉強をする理由はほとんどありません。そしてまた、なまることがささやかながら世界の思想と人類の文化に②コウケンする方法なのです」と、「なまること」の重要さが強調されていた。

この間、ハンブルクに戻る列車の中で窓が開いていて、夏でも通り風が冷たかった。隣の人が閉めましょうか、と言ったのをきっかけに天気などについて軽い会話を交わした。その人が「あなたはなまりが全然ないんですねえ」と感心して言うので、わたしは苦笑した。(3)どうでもいいことをどうでもいい人としゃべっていると、なまりが消える。しかし、自分の頭で考えて真剣に何か言おうとすると、なまりが出る。自分の書いた詩や散文の朗読ともなると、なまりそのものがリズムの重要な構成要素にさえなる。

文学を書くということは、いつも耳から入ってきている言葉をなんとなく繋ぎ合わせて繰り返すことの逆で、言語の可能性とぎりぎりまで向かい合うということだ。そうすると、記憶の③コンセキがたくさん活性化され、古い層である母語が今使っている言語を※デフォルメするのかもしれない。

だから自分がこれだと思うドイツ語のリズムを探して文章を作り、それを朗読する時には、いわゆる自然そうな日常ドイツ語からは離れる。ドイツ語として聞いていて大変聞き取りやすいとはよく言われるが、それでも(4)どこか「普通」ではない。(5)それはまず何より、わたしという個体がこの多言語世界で吸収してきた音の④シュウセキである。ここでなまりや癖をなくそうとすることには意味がない。むしろ、現代では、一人の人間というのは、複数の言語がお互いに変形を強いながら共存している場所であり、その共存と歪みそのものを無くそうとすることには意味がない。(6)むしろ、なまりそのものの結果を追求していくことが文学創造にとって意味を持ちはじめるかもしれない。

（多和田 葉子、『エクソフォニー　母語の外へ出る旅』より）

# 学力検査問題［国語］（その二）

（2023 一般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

※ エクソフォニー　母語の外に出た状態を指す言葉。筆者は大学卒業後ドイツで暮らし、ドイツ語で小説を書いてきた。
デフォルメ　対象の自然な形を変形すること。

問一　空欄 A に入る適語を漢字で記せ。また、傍線部①～④について、カタカナを漢字に直せ。

①マカ　②コウケン　③コンセキ　④シュウセキ

問二　傍線部（1）「話される言葉が、やたらに絨毯を持ち上げてバタバタさせているだけで、埃が舞いたち、落ち着かないわりに、少しも刺激がない」とあるが、「刺激がない」というのは、テレビで話される言葉に何がないということか。文中から十字程度で抜き出せ。

問三　空欄 B に入る最も適当な言葉を、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** 翻訳機　**イ** ＶＲゴーグル　**ウ** 楽譜　**エ** 見取図　**オ** 音声ガイド

問四　傍線部（2）「エクソフォニーとは、新しいシンフォニーに耳を傾けることだ」とあるが、筆者にとっての「新しいシンフォニー」とは何であったか。文中の語を使って、十五字以内で具体的に記せ。

問五　傍線部（3）「どうでもいいことをどうでもいい人としゃべっていると、なまりが消える」とあるがなぜか。その理由となる部分を、文中から三十五字以内で抜き出せ。

問六　傍線部（4）「どこか『普通』ではない」とあるが、なぜか。その理由となる部分を文中から二十五字で抜き出せ。

問七　傍線部（5）「それ」の指示内容を二十五字以内で記せ。

問八　傍線部（6）「むしろ、なまりそのものの結果を追求していくことが文学創造にとって意味を持ちはじめるかもしれない」とあるが、ここでの「なまり」とはどのようなものか。四十五字以内で記せ。

# 学力検査問題［国語］（その三）

（2023 － 般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

**2**

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

私はもう50年以上、歌を作ってきた人間であるが、知らず知らずのうちに、人が日常使っている(1)「それらしい」言葉への警戒心というか、嫌悪感が人一倍強くなってきているのを感じている。誰もが普通に使う言葉、それを使えば容易に相手に同意を得られそうな言葉をいったんは呑み込んでみるという習性が、いつのまにか沁みついてしまったようだ。

思えば、日常の会議などは出来あいの言葉のオンパレードである。偉いひとの挨拶も、どこかで聞いたなあと思うフレーズで固められていることが多い。たぶん日常生活ではそれでいいのである。毎日顔をあわせる御近所で、「おはようございます。今日は、川音もほがらかですねえ」なんて挨拶すれば、相手はヘンな顔をするのは必定である。

しかし、あまりにも素早く相手と繋がれる言葉と言うのは、たいてい胡散臭いものだ。それはあらかじめ相手にもその内容が想定されていて、それをなぞる言葉だからである。思考の枠組み自体がすでに共有されているという安心感の上で、単なる架橋としての言葉だからであり、こちらに新鮮な驚きと喜びをもたらすことは少ない。それは私も知っている問題ですよという確認にはなっても、私の考えたことではないからだ。

相手との一対一の関係のなかで、その場で一回性の新しさをもって紡ぎ出された言葉でなければ、相手の心に届くものにはならないのだろう。

アナログとかデジタルという言葉も、もう普通に使われる言葉になってしまった。デジタルはディジット、つまり指に由来する言葉である。指折り数えるというような、離散的な量の表示である。

アナログは連続量と訳されることが多いが、もともとはアナ（類似の）とログ（論理）に由来する言葉である。ある量を別の何かの量に変えて表示すること。時間という連続量を、文字盤の上の針の角度で類似させたり、温度を水銀柱の高さで①キンジさせたりする、これらがアナログ表示。いっぽう、デジタル時計では、連続量である時間を数値化する。標本化するのだと言ってもいいだろう。連続量を離散量に標本化する作業だから、どんなに細かく区切っても、量と量のあいだには②空隙が残る。

われわれはアナログの世界に生きている。1分、2分という区切りに関係なく時間は私のなかを流れているし、空気にもその匂いにも境目はなく、数えることはもちろんできない。

そんな世界にあって、感覚としてアナログを捉えることはできても、それを表現することはできないものである。表現した途端にそれはアナログからデジタルに変換されてしまうからである。アナログ世界は表現不可能性のなかでのみ成立しているとも言える。「今日は38度もあった」と言えば、38度という数値は理解できるが、その人が感じている暑さは、38という数値のなかにはない。（ A ）

何も数値化だけがデジタル化なのではなく、言葉で何かを言い表わす、そのことがすなわちデジタル化そのものなのである。言葉で表わすとは、対象を取り出して、当てはまる言葉に振り分ける、すなわち分節化する作業である。外界の無限の多様性を、有限の言語によって切り分けるという作業なのである。（ B ）

一本の大きな樹がある。「大きな」という言葉の選択の裏には、「見上げるばかりの」とか「天にも届きそうな」とかの別の表現が、［ I ］な可能性としては数えきれないほど存在したはずで、そんな可能性をすべて断念し、捨象した表現が「大きな樹」という③ベンギ的な表現になったのである。「大きな樹」は、その樹の属性の一部ではあっても、その樹の全体性には少しも届いていない。(2)「言葉には尽くせない」という表現自体が、言葉のデジタル性をよく表わしている。（ C ）

折に触れてコミュニケーションの大切さが言われるが、私たちはともすれば、デジタルをデジタルに変換しただけの作業を、コミュニケーションだと④サッカクしがちである。「この文章の意図するところを五〇字以内でまとめよ」式の、言葉の指示機能の反復レッスンは、デジタル表現を別のデジタル表現に変換する練習にしか過ぎない。（ D ）

もともと言語化できないはずのアナログとしての感情や思想があり、それを言語に無理やりデジタル化して相手に伝えること、それがコミュニケーションの基本である。『哲学事典』（平凡社）は、そのところを、「送り手が記号を媒介にして知覚、感情、思考など各種の心的経験を表出し、その内容を受け手に伝える過程」と定義している。ここで言う「記号」とは、ヒトの場合であれば言語ということになるが、動物の場合は、鳴き声や、身振り、⑤威嚇など、いずれもアナログな表現がコミュニケーションにデジタルを用いることが多いのである。（ E ）

言語を媒介としているので、受け手としては、どうしても言語の抱え持っている［ Ⅲ ］な情報そのものを、送り手の伝えたかったすべてと考えてしまいやすい。しかし、(3)送り手の内部でアナログのデジタル化は、ほとんどの場合、不十分なものであるはずなのである。特に複雑な思考や、あいまいな感情などを伝えようとするときには、デジタル化はほぼ未完のままに送り出されると思っておいたほうがいいだろう。

従って、伝えられたほうは、言葉を単にデジタル情報として、その辞書的な意味だけを読み取るのではなく、デジタル情報の隙間から漏れてしまったはずの相手の思いや感情を、自分の内部に再現する努力をしてはじめてコミュニケーションが成立するのである。真のコミュニケーションとは、ついに相手が言語化しきれなかった「間（あいだ）」を読みとろうとする努力以外のものではないはずである。それがデジタル表現のアナロ

# 学力検査問題［国語］（その四）

（2023 － 般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

グ化であり、別名、(4)「思いやり」とも呼ばれるところのものなのである。

（永田 和宏、『知の体力』より）

問一　傍線部①～⑤について、カタカナを漢字に直し、漢字には読み仮名を付けよ。

① キンジ　② 空隙　③ ベンギ　④ サッカク　⑤ 威嚇

問二　傍線部（1）「『それらしい』言葉」とは異質の内容のものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で記せ。

**ア** 誰もが普通に使う言葉
**イ** 出来あいの言葉
**ウ** 素早く相手と繋がれる言葉
**エ** 単なる架橋としての言葉
**オ** 一回性の新しさをもって紡ぎ出された言葉

問三　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入るべき適語を、**ア**～**オ**からそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

**ア** 辞書的　**イ** 論理的　**ウ** 経験的　**エ** 例外的　**オ** 潜在的

問四　傍線部（2）「『言葉には尽くせない』という表現自体が、言葉のデジタル性をよく表わしている」とはどういうことか。六十字以内で説明せよ。

問五　次の一段落を挿入する箇所として適当なものを、（ A ）～（ E ）から一つ選び、記号で記せ。

> 人は自分の感情をうまく言い表わせない時、言葉のデジタル性を痛感する。言葉と言葉の間にあるはずのもっと適切な表現をめぐって苦闘する。感情を含めたアナログ世界をデジタル表現に移し替えようとするのが、詩歌や文学における言語表現であるとも言える。

問六　傍線部（3）「送り手の内部でアナログのデジタル化は、ほとんどの場合、不十分なものであるはずなのである」とあるが、その理由の説明として適当なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で記せ。

**ア** アナログである感情や思想は、行動で表現することが必要であり、そのことによってのみ外部に理解される特質をもつから。
**イ** 心情や思想などを表現する場合は、デジタル性をもつ言語に置き換えると、表現できない部分ができてしまうから。
**ウ** デジタル性をもつ言語は、本来複雑な内容を表現することに適しておらず、もともと意思伝達の手段としては不完全であるから。
**エ** 心情や思想などが相手に完全に伝わるためには、自己内部における理解と整理をした後に、言語に置き換えることが必要となるから。

問七　傍線部（4）「『思いやり』とも呼ばれるところのもの」について、「思いやり」のあるコミュニケーションに必要な事を、本文の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

# 学力検査問題［国語］（その五）

（2023 － 般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

**3** 次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

「遅くまで残業している部署にかぎってミスは多いし、成果もあがっていない。いったい何をやっているんだ」

「課長ががんばれ、がんばれとハッパをかけるたびに部下はやる気をなくしていく」

会社や役所で最近、こんな声がたくさん聞かれるようになりました。

昔から、無能だがやる気だけはあるという人がいちばん傍迷惑だといわれたものです。それが今では単に迷惑なだけでなく、組織全体に甚大な悪影響を及ぼしています。「熱意」「意欲」で採用した人物が次々に不祥事を引き起こし、トップの責任が問われている自治体。熱血社員を幹部に抜擢したところ、業績が低下するばかりか優秀な社員が辞めてしまい、倒産の危機に瀕している会社。値下げ競争で人件費をギリギリまで絞り、店員を長時間モーレツに働かせたら「ブラック企業」として世間に知れ渡り、人手が集まらなくなって店舗閉鎖に追い込まれた外食業。こうした例は(a)枚挙にいとまがありません。

似たような現象は、職場のチームや集団でも起きています。ある中小企業の経営者は、「うちの会社では社員がワイワイガヤガヤ、夜中まで議論しているが、新しいアイデアやブレークスルーは一つも生まれない」と嘆いていました。多国籍の人々からなるプロジェクトでは、日本人グループだけが浮いてしまうとしばしば報告されています。そして、グローバル経営の第一線で仕事をする人たちの間では、「日本人はチームワークが下手だ」という、これまでと真逆の評価が定着しつつあります。

いつからこうなってしまったのでしょうか？

私は一九九〇年代が大きな境目だったと分析しています。

それまでの〝がんばり〟が価値を生む時代から、がんばることが価値を生まないばかりか、逆に価値を損ないかねない時代へ、ドラスティックな変化が起きたのです。

「がんばる」とは、物事を決まった方向へひたすら推し進めていくことです。受験勉強、スポーツの猛練習、荷物運び、飛び込み営業などがそうです。そこでは努力の量が求められています。 A 九〇年代を境に、努力の「量」ではなく「質」が求められるようになりました。物事を決まった方向へ推し進めるのではなく、方向を見つけることが最重要な仕事になったのです。やっかいなことに、(1)この量と質は関係がないどころか反比例します。脇目もふらずに一つの方向へ推し進めれば、正しい方向を見つけることはできなくなるからです。

しかし、モノやサービスは量から質へと消費者のニーズが変わったことが理解されているのに、努力、やる気についてはまだ変化が必要なことさえ気づかれていません。

とくにわが国では九〇年代に起きた、ある不幸な偶然によって、革命的なその変化を十分に理解するチャンスを逸してしまいました。そして方向転換が必要な時期に〝がんばり主義〟に拍車をかけるという致命的な過ちを犯してしまったのです。

(2)結果は冷厳です。近年は日本企業から独創的な製品やビジネスモデルが生まれないし、当然ながら社員の待遇も良くなりません。また、社員の尻をたたき〝がんばり〟をたきつけていると、パワハラで訴えられたり、「ブラック企業」のレッテルを貼られたりして、優秀な社員の集団離職や、海外企業から部署丸ごとの引き抜きに遭うといった事態を招いています。そして各種の統計やデータが示すように、九〇年代以降の日本企業は欧米に(b)水をあけられるばかりか、中国、韓国といった国々の企業にも後塵を拝しているありさまです。

それでも、「 B 」のことわざどおり、ちょっと景気が上向くと、失敗をふり返ることさえ忘れてしまいます。本格的な景気回復に向け、二〇二〇年の東京五輪の成功に向け、「一丸となってがんばろう！」と政治家や財界人が気勢をあげる姿を見ると、「ちょっと待って！」と叫びたくなります。

その姿は、まるで〝がんばり病〟とでもいうべき病気に罹っているかのようです。「病気」を放置したままのカラ元気だけでは、上昇気運も長続きするはずがありません。

今、私たちにとって必要なのは、まず C 〝がんばり〟に D という事実をしっかり受け止めることです。

（太田 肇、『がんばると迷惑な人』より）

# 学力検査問題［国語］（その六）

（2023 ― 般 ＩＢ）

**解答はすべて解答用紙に記入せよ。**

問一　傍線部（a）、（b）の意味として最も適切なものを、**ア**～**オ**からそれぞれ選び、記号で記せ。

（a）　枚挙にいとまがありません

**ア** 数え切れないほど多い　**イ** 世間の注目を集めている　**ウ** 見解が対立している　**エ** 社会的に問題視されている　**オ** 誰でも知っている常識である

（b）　水をあげられる

**ア** 無視される　**イ** 関係が薄くなる　**ウ** 差をつけられる　**エ** 対立関係になる　**オ** 優位に立つ

問二　空欄［A］に入る語句として最も適切なものを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** さらに　**イ** あるいは　**ウ** ところで　**エ** 例えば　**オ** ところが

問三　空欄［B］に入る語句として最も適切なものを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** すずめ百まで踊り忘れず　**イ** 喉元過ぎれば熱さを忘れる　**ウ** 鶏は三歩歩けば忘れる　**エ** 彼岸過ぎれば暑さを忘れる　**オ** 猫は三年の恩を三日で忘れる

問四　傍線部（1）「この量と質は関係がないどころか反比例します」とあるが、この文の説明として最も適切なものを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** 努力の「量」が求められなくなるのに従って、努力の「質」が求められるようになったということ。
**イ** 努力の性質が、方向を持たない「量」から、方向を持った「量」に変化してきたということ。
**ウ** 努力の「量」を求めて一つの方向に突き進もうとすると、努力の方向を見誤り、「質」が伴わなくなるということ。
**エ** 努力の「量」と努力の「質」は、それぞれの方向によっては、矛盾が生じるということ。
**オ** それまでは、努力すればするほど努力の「質」も向上したが、努力の方向が重視されることで、そうならなくなったということ。

問五　傍線部（2）「結果は冷厳です」の説明として最も適切なものを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** 努力を続けても、結果が出ず、努力のせいでかえって問題が生じるということ。
**イ** 努力しても結果が出ないと評価されないということ。
**ウ** 方向転換のために脇目もふらずに頑張ることをしなかったために、成果を挙げることができなかったということ。
**エ** 不幸な偶然に見舞われると、いくら努力しても、問題が噴出してしまうということ。
**オ** 九〇年代以降国際競争が激しくなり、成果主義の導入で努力の価値が下がったということ。

問六　空欄［C］、［D］に当てはまる語句の最も適切な組み合わせを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** C 努力の量を犠牲にする　D 害があるだけなく、意義も認められなくなった
**イ** C 努力の質を犠牲にする　D 意味がないばかりか、有害になってきた
**ウ** C 努力の量を向上させる　D 意味もなければ害もない
**エ** C 努力の質を向上させる　D 意味がないばかりか、有害になってきた
**オ** C 努力の量を向上させる　D 害がないばかりか、意義が認められてきた

問七　本文全体の内容の説明として、最も適切なものを、**ア**～**オ**から選び、記号で記せ。

**ア** 九〇年代には職場だけで生じていた問題が、形を変えて現在は政治の場で噴出していることに警鐘を鳴らしている。
**イ** 九〇年代と二〇一〇年代を対比させることによって、求められる努力の方向性が変わってきたことを論じている。
**ウ** 国際競争に打ち勝つことを最重要課題に設定し、そのための方策を論じている。
**エ** 価値観の変革を主張し、努力を否定した上で、国際競争に参加する必要はないと論じている。
**オ** 近年の時事的な事例や身近な例を挙げつつ、努力の内容が問題であることについて論じている。

# 解答用紙［国語］

2023
般ⅠB

受験番号

1

問一
A
①
②
③
④

問二

問三

問四

問五
から。

問六
から。

問七

問八

2

問一
①
②
③
④
⑤

問二

問三
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ

問四

問五

問六

問七

3

問一
a
b

問二

問三

問四

問五

問六

問七

# 解答用紙［国語］

2023 般IB

受験番号

## 1

問一 A 文法 ①

問二 映像を生み出す言葉の力

問三 エ

問四 ドイツ語の文の音楽的な流れ

問五 いつも耳から入ってきている言葉をなんとなく繋ぎ合わせて繰り返すから。

問六 古い層である母語が今使っている言語をデフォルメするから。

問七 自分がドイツ語で書いた文学作品を朗読したもの。

問八 母語とそれ以外の言語が強く影響を及ぼし合って生まれる、その個人特有の言語表現や音声表現。

問一 ① 任 ② 貢献 ③ 痕跡 ④ 集積

## 2

問一 ① 近似 ② くうげき ③ 便宜 ④ 錯覚 ⑤ いかく

問二 オ

問三 Ⅰ オ Ⅱ エ Ⅲ ア

問四 言葉に置き換えることは対象を一つの意味に限定するため、捨象する部分が生まれ全体性を表現することが難しいということ。

問五 C

問六 イ

問七 相手の言葉を辞書的な意味に限定せず、相手の心情をもくみ取り、自分の内部に再現させるように努めること。

## 3

問一 a ア b ウ

問二 オ

問三 イ

問四 ウ

問五 ア

問六 イ

問七 オ